慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	「悪態」の考察 : 言語表現の芸能化をめぐって
Sub Title	Akutai : A study of malediction : With emphasis on the dramatization of the vernacular
Author	西村, 亨(Nishimura, Toru)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1986
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.49, (1986. 7) ,p.1- 16
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00490001-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「悪態」の考察

――言語表現の芸能化をめぐって――

西村　亨

某社から刊行される日本語の百科事典のしごとで「悪態」という項目を担当した。悪態は単に対象に向って悪罵を放つということだけでなく、言語表現の中でもその占める位置は特殊である。ことに実用的な言語表現そのものが言語伝承となり、型を生じ鑑賞を生み、芸能と言うべきものへと転化してゆく、その過程に興味の尽きないものがある。事典の限られた紙数の中で意を尽くさない点もあったので、少し観点を変えて、言語表現の芸能化を主題として悪態の考察を試みてみようと思う。

言語表現としての位置

われわれの言語生活の中で喧嘩・口論もしくは他に向って制裁を加えるというような場で、隠されている悪行を暴露して非難を浴びせ、あるいは触れられたくない弱点を指摘し、抉剔して萎縮させるなど、相手をおとしめ、自己の優位

を確立しようとする一群の攻撃的な言いまわしがある。その種の言語表現に属するものとして、悪口・悪態・皮肉・あてつけ・あてこすり・厭味・陰口・諷刺などと呼ばれるものがある。

これらの中で、悪口・悪態は直接的に相手をののしり、力をもって押え込もうとするもので、いわゆる罵詈語を用いることが多い。それに対して、皮肉やあてつけ・あてこすりは婉曲な表現でありながら、意地悪く、遠回しに批判を加えるもので、皮肉は語原的には皮と肉とが引き離される痛さを言うものであろう。今日われわれが用いるような「骨身にこたえるような痛烈な非難」「遠まわしに意地悪を言ったりしたりすること」という意味での皮肉は劇場関係の隠語から出たものらしい(小学館『日本国語大辞典』)。あてつけはことばどおり非難・軽蔑されるべきある事象にかこつけて、比喩的に批判するのであるが、あてつけとほとんど同義語であるあてこすりは「こする」ということばに諷諭の意味とざらついたもので肌をこする痛みの感覚とを示している。これらは日常の言語生活にあって珍しいものではないが、それでも表現の効果を意識するために、いかに痛烈に攻撃を加えて顔色なからしめるか、あるいは周囲の同感を誘うかという点にくふうを凝らすことになる。その洗練されたものは「寸鉄人をさす」効果をもって人々の印象にとどまり、警句・ことわざとなって伝承されることもあれば、また既存の警句・ことわざを上手に利用することによって効果を倍増させることもある。笑いの効用なども、この方面では特に顕著なものがある。

厭味や陰口は右のような表現技巧よりは対象の非難されるべき言動・性格等その事実をあげることに主眼があり、厭味はひとのいやがることをあえて言う、ひそかな敵意を抱くものであり、陰口となると当人不在の場で不快な風評をふりまくのであるから、これらの性格は陰湿なものである。陰口と同じように間接的な発言であっても、諷刺は社会性や政治性をもっていることに特色がある。その批判や攻撃の対象が特定の個人や組織・団体に向けられている場合でも、

それは社会の問題や話題になっているそれらであり、社会全般に向って、共通のものであるという意識をもって訴えかけている。ただ間接的である点において陰口と似ており、発言者の名を隠すことによって反撃の鉾先からのがれようとしている。しかし、社会性・政治性があるという条件からはむしろ匿名批評というものに近く、それと異なるのは、皮肉・あてつけ・あてこすりと同じように、より多く表現の技巧に留意し、笑いを利用しようとしている点である。その手段として古くは落書が用いられた。落書の様式には謎やことわざに類するものもあるが、落書と落首とがほとんど同義語のように使用せられることからも明らかなように、狂歌や狂句の様式を利用するという伝統がある。ここにも、表現技巧を凝らし、笑いを大いに活用するという創作的意図が現れている。現代の社会においては、新聞・雑誌・放送などのマス・メディアを通じて社会に訴えるという方法が一般であり、機知に富むものが喝采を博するところから、ますます奇抜を競う傾向がある。

このような近似する諸種の言語表現の中で、悪態ははなはだ特異な性格を見せている。悪態と悪口とはことばの意味の上でさしたる違いがないように見られるが、悪口が発言の内容そのものを語義の中心においているのに対して、悪態は発言もしくは発唱の形態に特に意識せられるものがある。悪態という用字にもそれが示されているし、悪態を動詞化した「あくたれる」ということばなども、語感の上に発言の姿態を写そうとしているようである。悪態は「悪対」という用字もあって、『大漢和辞典』(大修館書店)はそれに「あくたいもくたいの省略語の当字」であると注しているが、語原は明らかでない。悪態が盛んに社会に行われるようになった江戸初期からこの語も出現したかと思われる。

信仰生活と悪態

もともと、古代日本の社会では対立する者どうしの武力による争いに先立って、もしくはそれに代って言語の呪力に基づく「ことば戦い」が行われたもので、敵の卑小であることを宣言して意気を沮喪させ、身方の士気を鼓舞する、そういう効果を考えていた。海石榴市の歌垣の場における袁祁の命と平群の志毘との歌の問答などその一例である（清寧記）。皇子の宮室の一隅が傾いているという悪口に対して、それは大匠（おおたくみ）の腕がつたないからに過ぎないと言い返す。まさに悪態のかけあいの様相を呈している。

折口信夫の文学史・芸能史に従えば、こういうことば戦いは神と精霊との対立を原義とするもので、遠来の神なるまれびとが土地の精霊を圧伏して服従を誓わせようとする。精霊はそれに対してあるいは無言（しじま）を守り、あるいは神のことばをもどいて抵抗を試みる。その根本を言えば、神が自らの出自の尊貴であり、威霊に満ちていることを言い、反対に精霊の出自の賤しく、当然神の命令に服従すべきであることを宣するところに趣意が存するわけである。従って、一方は名告りとか系図の言い立てという形をとることになり、これが武士の戦場における名告り、「やあやあ遠からん者は音にも聞け……」式の様式的な発唱法にまで尾を引くことになる。自らの系図の正しさ、高貴さを主張して、戦わずして屈服せしめようとの意図をもつものである。一方、精霊の卑小さを指摘し自覚せしめて、無益な抵抗を止めさせようとすることばは、相手の愚かさ、品位の下劣さ、醜さ、汚（けが）れというたぐいを内容とするので、これがすなわち罵詈語・喧嘩ことばに相当する。現代に至るまで、これらのことばの範疇は根本において大きな変動をもつことなく続いている。

悪態発生の場としては、祭りの際に訪れる祖霊その他の来訪神、折口信夫の用語でいうところの「まれびと」が村人

たちに教戒を与える行事が重視せられる。今日ではしばしば季節的な話題としてテレビ等に報道せられる秋田県男鹿半島地方のナマハゲは小正月の来訪神であるが、蓑笠に身を包み、異様な面を被り、包丁を手に家々を訪れて、こどもたちに親の言いつけを聞くように、よく勉強するように、などということを大声で言い聞かせる。幼いこどもたちは恐れて泣き出す者もあるが、ともかくこれは教戒のことばである。ナマハゲという名も「なもみはげたかよ、豆こ煮えたかよ」と唱えながら訪れて来る、そのことばから出たものとされ、なもみは火だこのことで、しごとに身を入れぬ怠惰な者はいないかと戒めているのだと説明されている。

沖縄県八重山地方の旧暦の盆には「あんがま」という一種の盆踊りが行われ、たとえば、石垣島登野城のそれではウシュマイ(翁)とンミ(媼)の仮面を付けた一対の神が大勢の伴神を率いて訪れて来る。翁・媼は遠い先祖神であり、伴の覆面をした男たちは近い先祖神を表すものと言うが(東京堂出版『沖縄文化史辞典』)、訪れた家の座敷において、翁・媼が家の主人に対して祝言を述べ、見物に集った群衆との間に機知と皮肉に富んだ応酬があり、たがいに相手を言い負かそうと争うのである(同上)。折口信夫は大正十二年の採訪の際の印象を左のように記している(「国文学の発生(第三稿)」)。これも石垣島か、あるいは小浜島でのものと思われる。

盆の三日間夜に入ると、村中を廻って迎へられる家に入って、座敷に上って饗応を受ける。勿論、若い衆連の仮装で、顔は絶対に露さない。元は、芭蕉の葉を頭から垂れて、葉の裂け目から目を出して居たと言ふが、今は木綿を以て頭顔を包んで、其に眉目を画き、鼻を作って、仮面の様にして居る。大主前(オシュマイ)が、時に起って家人に色々な教訓や批難或は慰撫・激励をするが、軽口まじりに人を笑はせることが多い。時には、随分恥をかかせる様なことも言ふさうである。大主前(ナシュマイ)の黙って居る間は、眷属たちが携へて来た楽器を鳴して、舞ひつ謡ひつ芸づくしをして歓を

恋にする。家の主人・主婦等は、ひたすら、あんがまあの心に添はうと努めて居る。大主前（オシュマイ）は、色々な食物の註文をして催促することもある。（折口信夫全集第一巻）

この採集のほうが神の教戒という性格をよりよく示しているが、神が人に対して教戒し、時にはその悪行をなじるという原義から、神と人相互の間にことば戦いが行われ、競技的に優劣を競うという方向へ意義を軽じてゆく変化の経路を見ることができる。

茨城県西茨城郡岩間村の愛宕神社の正月十四日の祭りでは、一村の男女が総出で悪口を言い合い、天狗に扮した司祭者と悪口争いをするという（岩崎美術社『民俗の事典』）。これなどはまだ一方に神と言うべき位置にある者の姿を見せているが、もう一段階変化すると、群衆が悪態をつく主体となり、土地の人々すべてを批判の槍玉にあげることになる。千葉市の千葉寺（せんようじ）で十二月晦日に行われた「千葉笑い」のことは、延享年間刊行の『本朝俗諺志』等に見えており、俳諧の季題ともなって広く世間に知られているが、この夜集まる人々はみな覆面をしており、「役人の依怙贔屓（ひいき）や土地の者の不孝・不忠などを批判し笑ったところから、人々は笑われまいとして行跡を慎んだという」（小学館『日本国語大辞典』）。この場合には、群衆がすなわち来臨する神であり、日本人には群衆の声の中に神の声を聞こうとする習性が存したのである。こどもが悪口の主体となるのも、無垢のこどもに神が宿ると考え、こどもがしばしば神託を伝えた日本人の信仰生活を基盤とするものであろう。

宮城県塩釜市で正月十五日の夜行われる「ざっとな」という行事では、こどもたちが集って「土地の老若男女の日ごろの素行について、よからぬ点をその者の背戸の辺に来て、声をそろえて悪口を言いちらす。その最初に「ざっとな〳〵、ここに話があるとな」という定まり文句で始めたので、この行事もザットナと呼んだ」とされている（東京堂出

版『年中行事辞典』)。ここでは、こどもの声がすなわち神の声なのである。似たようなことは山形県酒田市の飛島でも小正月の鳥追行事に行われたという(同上)。

悪態の競技性

祭りに参集する群衆が相互に悪口を言い合う「悪態祭り」の習俗は、これまた近世以後各地に盛んであったことが諸種の記録に残されている。これらは悪態の争いに勝った者が福運を得るという考えから、たがいに言い勝とうと技を競うので、祭りの庭の興奮をたかめ、悪態の競技性を助長することになった。悪態が言語表現としての技巧を練磨して日常的な言語から脱却し、その特殊な性格を明らかにしてくるのも、この段階を経過したことによるであろう。

悪態祭りの典型的なものとしてよく知られているのは、京都の八坂神社、世に言う祇園の「けずりかけ神事」における「悪態つき」であろう。削掛けの神事は今日では一般に白朮(おけら)祭りの名をもって呼ばれており、「大晦日から元日朝にかけて、社前におけら(菊科植物で薬草)を材料としたかがり火をたき、京都中の人々が参詣して、この火を吉兆縄と呼ぶ縄に移し取って家に持ち帰り、元日の雑煮を煮る火種に用い、神棚や仏壇の御燈明にもする。一年のけがれを払うことになるのだという」(東京堂出版『年中行事辞典』)。これを削掛けを神事と呼んだのは、古くは「十二月二十八日に新しい火をきりだし、これを金燈籠に移し、元日丑刻(午前二時)に、この火を削掛の木に移して、おけらを加えて焼き、その煙が東へ流れると近江国はその年凶年、西へ流れると丹波が凶年になるといって、その豊凶をうらな」(同上)ったことによるもので、年占の神事だったのである。それに伴って見物が悪態をつきあったのも、もとは近江方・丹波方に分れて福運をわが方に得ようと争ったものであろう。それが個人の争いに転じて、福運も悪態つきに勝つ個人が得

るものと変じたのである。

井原西鶴の『世間胸算用』巻四「闇の夜の悪口」の一篇には、この祇園の削掛けの神事が描写されている。

神前の燈火暗うして、互いに人面の見えぬ時、参詣の老若左右に立ち分れ、悪口の様様云ひ勝、それはそれは腹抱へる事なり。

とあって、その実例が数例載せられている。もちろん西鶴の創作ではあるものの、ここで言い交される悪態は悪態祭りの実態とそうかけはなれたものではあるまい。

おのれはな、三ケ日の中に餅が咽喉に詰って、鳥部野へ葬礼するわいやい。

おどれは又人売の請でな、同罪に粟田口へ馬に乗りて行くわいやい。

おのれが女房はな、元日に気が違うて子を井戸へはめ居るぞ。

おのれはな、火の車で連れに来てな、鬼の香の物に成りをるわい。

おのれが父は、町の番太を為た奴ぢや。

おのれの嘗は、寺の大黒の果ぢや。

おのれが弟はな、衒云ひの挟箱持ぢや。

おのれが伯母は、堕胎屋を為をるわい。

おのれが姉は、脚布せずに味噌買ひに行くとて、道で転びをるわいやい。

という具合である。これらの中ですぐれて口拍子よく悪態を言う若者が相手になる者のないほど言い勝っていたが、闇の中の当て推量で、寒中に綿入れも着ずにいる身なりを言い当てられ、「返す言葉も無くて、大勢の中へ隠れて、一度

にどっと笑はれける」という結果になる。

これらの悪態を見ると、われわれが予想するほどには表現技巧が凝らされているものではない。むしろ、単純に、どんなひどい内容をもって相手を貶めるか、どんな縁起でもないことを言って呪ってやるか、という着想の意外性に主眼があるように見受けられる。つまり、言語表現(言いまわし)の段階での悪態と言ってもよいように思われるが、「餅がのどに詰まって死ぬ」とか「(罪人として刑場に)馬に乗せられて行く」「気が狂って井戸へ飛び込む(もしくは、子を投げ込む)」というような表現が決してこの場の思い付きでなく、すでに世間での慣用となっている類型的な表現であることに気付かされる。それは、これらの表現が伝承せられたもの、言語伝承としての段階にあることを語っているのである。

河内(大阪府)の野崎観音の縁日は、いわゆる「野崎詣り」の群衆が参集することで知られているが、徳庵堤から寝屋川を舟を仕立てて溯る者もあれば、土手を歩いて行く者もある。この舟と土手との群衆の間に悪態が言い交されるのが名高い風習で、この口げんかに勝つとその年は運が強く、負けると縁起が悪いというので、たがいに知恵を絞って悪口を言い合ったものらしい。この光景は落語「野崎詣り」に活写されていて、初代春団治などが得意であった。もちろん、落語としての誇張や歪曲は加わっているが、「おうい、そこへ行く小さいの」と声がかかると、「なんや、山椒は小粒でもひりりと辛いぞ」と言い返す。これなどはことわざが巧みに利用されていて、やはり悪態が伝承と無縁でないことを思わせている。

同種の行事としてあげられるのは、福島県磐城地方で正月のどんど焼きの際に、たがいに相手のオンベを早く焼いてしまおうとして、隣部落どうしの争いになることが多い。これを「悪態吹き」と呼んでいるが、「鮟鱇買いさやったれ

ば、夕顔ふくべ買って来た」というような笑いを主とした文句が記憶されていた、という(平凡社『綜合日本民俗語彙』)。「鮟鱇買いさ云々」の文句は、むしろ落語などの話芸からの逆輸入でないかと思われるふしもあるが、こういう文句が記憶されていたという記述は、悪態が日常的な会話ではなく、言語伝承へと固定化しようとする傾向にあることを証している。愛知県北設楽郡山間部に行われる花祭などでも、舞い処で舞う舞い人に対して、見物の間から盛んに声がかけられる。「よく舞うぞ、よく舞うぞ」という誉め詞が一転して、舞い手のしょうばいは炭焼きだ、どうりでおけつがまっ黒だ、というような悪態になる。花祭は特に祭りとしての興奮が昂揚するから、舞い人と見物とが一体となって、はやし声が飛び交う。もちろん、見物どうしの悪態もあり、村人どうしのすっぱぬきが哄笑を誘ったりする。和歌山県有田郡の山村に残っている御田の舞でも、参詣者が悪口の言い合いをし、貶すと秋のこなしが良いなどというそうである(平凡社『綜合日本民俗語彙』)。

こういう群衆の間の悪態は、誉め詞・はやし詞などと一体のものとして考察する必要があるようで、現代の社会生活においては、相撲・プロ野球・プロレスリング等の観衆のやじや応援、歌舞伎芝居その他の演劇のかけ声・やじなどもその一端である。近時プロ野球の応援が様式的になり、型をもとうとしていることなど注目に価する。『日本民俗事典』(弘文堂)の「あくたいまつり」の項(執筆萩原秀三郎)がすでにそのことを指摘している。

ともかく、悪態が神の教戒から転じて群衆の中に神の声を聞き、あるいは神と精霊との対立が隣村・隣接村落どうしの豊饒や吉凶の年占となり、さらに個人的な福運のうらないへと変じてゆく。その間に言語の表現技術が洗練され練磨されて言語伝承へと化していった経路が右の諸例に見られるのである。

悪態の芸能化

江戸っ子の喧嘩ややくざの生活に見られる啖呵(たんか)となると、単に相手の悪口を言うことに目的があるのではなく、それをいかに修辞的に美しく飾って述べ立てるか、また第三者(見物)の喝采を博するように技巧的に発唱するかという点に価値を感じていることが明らかである。これらは前述の民俗生活を基盤として、一種の芸能に昇華したと見ることも許されようと思われる。江戸っ子が喧嘩となると「なに(言)ってやんでえ」とすぐ尻をまくりたがる、その心理に潜在するのが、自分は褌を締めている一人前の人間だ、成年戒を経過した男なのだという示威の気持だと説かれたのは池田彌三郎先生であるが、そういう行動伝承の上の型と相伴って、言語伝承の上にも型が生じてくる。それがすなわち慣用の文句で、喧嘩の悪態となると決ったように「水道の水で産湯を使ったおあにいさんだ」「先祖の助六に申訳が立たねえ」といった文句が飛び出してくるのは、常套句という以上に、それが喧嘩の際の言語技術のひとつの様式、決った手順となっているのである。それらは市民生活の中に滲透して、機会があると人の口に上ってくる。夏目漱石の「坊ちゃん」の中で、主人公の坊ちゃんが山嵐に教える「ハイカラ野郎の、ペテン師の、イカサマ野郎の、猫被りの、香具師(やし)の、モモンガーの、岡っ引きの、わんわん鳴けば犬も同然な奴」という悪態も、まさに江戸っ子の伝承なのであって、その内容は後述の素材を典型的に受け継いでいる。

悪態の発唱法の眼目は、その長い文句をいかに早口に、淀みなく言い立てるかに評価の基準があるようで、「啖呵を切る」という熟した表現がそれが言語技術の一種であることを示すテクニカル・タームとして存している。「啖呵」は「痰呵」とも書き、本来、激しくせきを伴って出る痰のこと、またその病気のことを言うことばであったが、それを治

療することが「痰呵を切る」ということなのだそうである。これが治まると胸がすっきりとするところから、「胸のすくような、鋭く歯切れのよい口調で話す、鋭い勢いでまくしたてる」ことを「啖呵を切る」と言うようになったものと説明されている(小学館『日本国語大辞典』)。

やくざの生活に、盃を受ける、返す、指を詰めるなどの儀礼的な伝承と共に、この種の言語技術の伝承が重視されているのは大変興味深い現象であるが、その言語技術の顕著に現れているのが、ひとつは名告りであり、ひとつは啖呵を切ること、すなわち悪態である。「手前生国は関東でござんす。関東と申しても広うござんす」という冒頭に始まって、富士と筑波が云々というような美辞を連ね、七五調に乗せて淀みなく述べ立てる。その詞章は修辞的であり、発唱は技巧的であって、まさに芸能の範疇に入るところまで進んでいる。それが鑑賞を伴っていることも芸能のひとつの条件である。そして、興味深いのは、これが神が出自を言い立てることを原義とする名告りの系統に属するのに対して、啖呵のほうは神が精霊を圧伏する罵りのことばの系列を引くものだということである。

江戸の町の生活は、これも落語の題材となった蝦蟇(がま)の油売りの口上に見られるように、口上や言い立てに特別な興味が持たれている。やくざの生活はその尖端を行くもので、もともと旗本奴や町奴など江戸初期の社会を横行した奴(無頼漢)の風俗の描写に始まった江戸の歌舞伎芝居が口先の芸に特殊な領域を持っているのは、いわば必然の成行きであった。たとえば、市川家の家の芸として歌舞伎十八番のひとつにも数えられる「外郎売(ういろうう)り」は外郎という薬の由来や薬効を述べる長文句、早口ことば・舌もじりなどを混えたそれを、役者がいかに淀みなく口演してみせるかに舞台の眼目が存している。外郎売りのせりふは二世市川団十郎の案出によるもので、享保三年「若緑勢曾我」において初演、大評判をとったが、これは市井の生活に実際に外郎売りの口上というものがあったのではなく、全くの創作であったという

が、こういうせりふの技術そのものが鑑賞の対象となり、一幕の芝居を構成することは、世界の演劇史上にも珍しい現象でないかと思われる。

悪態が舞台化したものでは「助六」がまさにその典型であり、これも悪態やその他の言い立てが芝居のプロットにないまぜられて一幕を構成している。今日最も多く上演される「助六由縁江戸桜」で言えば、三浦屋格子先の場では助六を初め、白酒売り七兵衛・かんぺら門兵衛・朝顔千平などそれぞれの名告りがあり、助六と意休の応接などはその全部が悪態の応酬のようなものである。さらに女性の奴とも言うべき遊女の悪態もある。揚巻が意休から助六に忍び逢うことを咎められて、開き直って言うせりふは、

慮外ながら揚巻でござんす。男を立てる助六が深間（ふかま）、鬼の女房にゃ鬼神がなると、今からがこの揚巻の悪態の初音。

と、これから悪態を述べ立てることをまず宣言している。「悪態の初音」はいかにも遊廓らしい表現で、いったん覚悟して堰を切ったからには存分に悪態を述べ立てようとの決意を見せているが、

意休さんと助六さんをこう並べて見た所が、こちらは立派な男振り、こちらは意地の悪そうな顔つき。たとえて言おうなら雪と墨、硯の海も鳴戸の海も、海という字に二つはないけれど、深いと浅いは間夫と客、間夫が無ければ女郎はやみ、暗がりで見ても助六さんと意休さんを取りちがえて、マアよいものかいなァ。……

といった具合に続いてゆく。これだけの引用の中にも「鬼の女房にゃ鬼神がなる」「間夫が無ければ女郎は闇」ということわざの引用があり、「硯の海も鳴戸の海も……」という比喩がある。いずれも世間で常用の言語伝承であり、それらを駆使しながら悪態がみごとに芸能と化した姿をここに見ることができる。

歌舞伎芝居における言語伝承の芸能化は「助六」に限ったことではない。「鈴が森」の幡随院長兵衛、「切られ与三郎」の源氏店、「白浪五人男」の稲瀬川勢揃いの場、「鞘当」の仲の町の場と思い付くままにあげてゆくだけでも、名告りや悪態が歌舞伎芝居という観客の鑑賞を伴った場でいかに芸能化しているかを直ちに諒解することができるであろう。そればかりでなく、近世末期までは歌舞伎の興行中一定の日に、ある俳優の登場に際して一時演技を中止し、ひいき客のある者が美辞を連ねた「褒め詞」を述べ立てる習慣があった(平凡社『演劇百科大事典』)とか、「暫」の舞台で主役がみえを切る際に、舞台上にいる役者たちが「ありゃ、こりゃ、でっけえ」と「化粧声」をかける習慣などに、言語伝承が芸能と化している特異な様相を見ることができる。前述の外郎売りのせりふが天保三年の「助六所縁江戸桜」上演の際復活せられて、以来「助六」に含まれるようになったことなども、この種のことばの芸能が一所に集約せられたものとして、とりわけ興味深く感じられるのである。

悪態の内容

一方、こどもの社会にも悪態は人気のある言語生活の一端を形成している。こどもの悪態を展望してみると、おとなの社会の縮図のように、おとなの悪態の諸要素を反映していることが明らかに看取せられる。前述の「坊ちゃん」の悪態に比肩するものとして、「たけくらべ」の美登利のつく、

意地悪るの、根生まがりの、ひねつこびれの、吃りの、歯かけの、嫌やな奴め。

という悪態などがあげられるが、

××学校いい学校。あがってみたら悪い学校。国語の時間に先生がいろはのいの字も知らないで、黒板叩いて泣い

ちゃった。

は、隣接する小学校の児童どうしがたがいに悪口を言い合うもので、その文句は「算数の時間に先生が一たす一もできなくて」とも言い換えられる。かつて悪態が隣接する村落どうしの豊饒や福運のうらないとして、たがいに相手に負けまいと知力を尽くし合ったおもかげをとどめるものであろう。

悪態の内容となる素材は相手の愚かさや品性の下劣さ、あるいは汚穢にかかわることばなどが主となるが、過去の日本の社会では不具や職業・階級・人種等に関する差別的な用語が用いられることもあった。また、悪態の効果をたかめるために、相手を「犬」とか「女狐」というような動物にたとえ、あるいは「三太郎」「与太郎」など笑うべき人物とされる擬人名をもって呼ぶなどの方法もある。諸外国に例の多い近親相姦、特に母子相姦をもって罵る例は日本には少ないようであるが、『古今著聞集』に聖覚（しょうかく）という法師の説経のことをうわさしている男たちが「聖覚」と呼び捨てにしているのに腹を立てた聖覚の供人が「おやまぎの聖覚や、ははまぎの聖覚や。」と罵ったという笑話がある。これはおやまぎめが聖覚と呼び捨てにするとはなにごとだ、と咎めたのであるが、はたの者の耳には聖覚その人をおやまぎ・ははまぎと罵ったように聞こえたというのである。「おやまぎ」と「ははまぎ」は同義語を繰り返しただけであるが、母子相姦をもってする罵詈語がこの時代に通用していたことを語っている。あるいは中京地方に今日も用いられる「たわけ」ということばがこの系統に属するものであろうかと考えられる（拙著、桜楓社『新考王朝恋詞の研究』「たはく」「まぐ」の項参照）。笠松宏至氏はこどもの悪態の

ばか。かば。ちんどん屋。お前のかあちゃん出べそ。

が母子相姦の印象をとどめるものでないかという考えを述べられたことがある（第一一回講座「古代学」）。

こどもの世界の悪態で注意されるのは口調のよさ、耳に聞く響きのおもしろさで、多くは七五調を基本として、ここでも悪態の芸能化への傾向の著しいことを証している。

かっちゃん数の子、にしんの子。お尻を狙ってかっぱの子。

などは頭韻・脚韻のおもしろさを主眼にしているし、汚穢にかかわるこどもの悪態の代表のような趣のある

みっちゃん道々×××して、紙がないから手で拭いて、もったいないから舐めちゃった。

なども、やはり人名からの音の連想で始まって、「……て」「……て」という音の繰り返しに興味をもっている。この種のこどもの名前から展開する人なぶりの悪態は折口信夫が「三郷巷談」（「土俗と伝説」一―三、大正七年）に数種を報告している。

でぶでぶ百貫でぶ。電車にひかれて、ぺっちゃんこ。

なども音に対する興味は同様であるが、こうして例をあげてゆくと、先に述べた悪態の内容として相手の愚かさ、品性の下劣さを言うもの、汚穢にかわるもの、差別的なものなど、およそ各種のものが出揃っているようである。こどもの言語生活に過去のおとなの社会の言語生活の残映を見ることができるという民俗学の考え方は、ここにもひとつの例証を加えている。